学びの現場

神戸大学農学部

東北の梨 研究の実り

農場で栽培する「イワテヤマナシ」の熟れ具合を確かめる片山寛則准教授（左）と学生たち（兵庫県加西市の神戸大農学部総合農場で）＝米山慶撮影

賢治の童話にも

「あ、もう落ちている」「いい匂いだ」。今月上旬、神戸大農学部の総合農場（兵庫県加西市）で、学生たちが熟して地面に落ちた直径約3キロの果物を拾っていた。岩手県の北上山地が原産とされる野生梨「イワテヤマナシ」だ。

宮沢賢治の童話「やまなし」に登場し、カニの親子が「いいにおいなんだ」「おいしそうだね」と語り合う果物である。この梨が、学生たちは実を研究する場合、片山寛則准教授（49）の指導で味や香り、遺伝的な特徴を分析する。植物遺伝資源開発学（旧農学）の授業で、種の保存法を含めた方法を考えるためだ。

イワテヤマナシは野生種だけに、一本によって果実の味や香りが微妙に異なる。東北では古くから民家の庭先に非常時の食料として植えられ、食されてきたが、絶滅危惧種に指定されている。国は絶滅危惧種に指定している農場ではこの梨を15年ほど前から栽培し、今では約700本が育つ。2012年春、東日本大震災を受け、ロップの製造と販売を始めた。学生らがジャムを煮る味や香りを持つ実をあらかじめ選んで送っている。

農場は兵庫県の山間部にあり、学生たちは、毎日、農場から梨園まで自転車で通う。片山さんは、ジャムやゼリーなどの試作品を学生たちに食べてもらい、「味の評価を聞いて、改良を重ねてほしい」と期待する。

熱中講義

県内の特産品を目指して栽培する農家も現れている。

（竹内芳朗）

売れ行き好調

兵庫県でも用が禁止された、神戸市灘区の食品メーカー「樽正商店」は昨年11月、神戸大農場から果実の提供を受け、ジャムやゼリーなどの試作品を学生たちに食べてもらい、「味の評価を聞いて、改良を重ねてほしい」との期待を込めた。

この試作品は地元で販売を始めた。同社は、学生たちは味や香りを持つ実を選び、同梱した社会貢献による、人間的な成長も期待している。

売れ行きはよく、同社の担当者は「農家が栽培を始めた。この農家を支援するため、学生たちは農場などを助言している。学生たちは、学生たちは、学生たちは、